

## 学部生時代から授かった研究の種

李 婷

今からちょうど20年前、私は交換留学生として来日し、日本語教師の夢を追いかけ始めた。日本語教育関係の科目はもちろんのこと、文化、環境、政治、ジェンダー、心理など様々な科目を履修し、留学生を対象とする日本語の授業も受けていた。中でも、メタ言語表現<sup>1)</sup>との運命的な出会いが研究の原点となり、私のライフワークにもなっている。

ある日、日本語の授業で、似ているようで違うスピーチの原稿を2種類配られ、どちらの方がわかりやすいのか、その理由について話し合う教室活動が行われた。話し合いの後、わかりやすいと全員一致の好評が得られた原稿にはあるが、わかりにくかった原稿にないのは、メタ言語表現だと教師の種明かしを受けた。続いて、メタ言語表現の定義や分類、典型例などの載っているプリントが追加で配られ、メタってなんだろうと興味津々に学んだ。日本語を2年間しか習っていないため、正直、定義や分類は全く理解できなかったが、なぜか典型例だけが頭に焼きついた。当時の私にとって、語学の勉強は一に語彙、二に文法という認識しか持っておらず、この語彙でもなく文法でもないメタ言語表現は一体なんだろうと新鮮さを感じながらも、妙に不思議に思っていた。また、その後の授業においても、ディベート<sup>2)</sup>などを通して、メタ言語表現の使用を練習していた。

その後、中国で日本語教師をした時も、どの教科書にも載っていないメタ言語表現を授業に取り入れようとしたが、自分でも十分に理解できていなかったため、何をどのように扱えばよいかまったくわからなかった。日本語の言語環境に恵まれておらず、日本人の教員と留学生以外に、生の日本語に接する機会はほとんどなかった。日本語のレベルを維持しようと、日本のテレビドラマのDVD鑑賞が休日の定番となった。ドラマを見ながら日本語を学んでいるうちに、メタ言語表現がたくさん使われていることに気づいた。ドラマとはいえ、日常的なコミュニケーションの場面が多く、登場するメタ言語表現もスピーチやディベートで使用されるものとは異なる表情を見せてくれたせいか、ますます魅了させられた。

修士課程では、迷いもせずメタ言語表現をテーマとする修士論文にとりかかった。そこで出会ったのは語用論と認知言語学で、当時の私にとって聞いたこともない真新しい

学問だった。初めて理論的な視点からメタ言語表現を眺めることができるようになり、いささか「研究者」としての快感を味わうこともできた。好きなテレビドラマで見つかったメタ言語表現を聞き取りながら、ひたすらパソコンを打つ日々が意外にも楽しかった。

しかし、修士論文を提出した後、達成感を味わったのも束の間だった。さまざまな疑問が生じてしまい、修士論文では何一つ答えられていないことに気づき、ただメタ言語表現に惚れているだけの自己満足ではないだろうかと思ったことさえあった。また、テレビドラマというフィクションの世界ではなく、リアルな言語生活において、メタ言語表現が実際にどのように使われているのか、日本語の使い手である母語話者がメタ言語表現をどのように考えているのか、実際に見てみたい、実際に聞いてみたいと思った。

そのようなもやもやした問題意識と、期待や希望に満ちた気持ちで来日し、至るところでメタ言語表現の使用を見聞きして、大興奮だった。いつの間にかメタ言語表現だけを拾う目と耳ができたような気もした。1年半の努力が実って、念願の日本語教育研究科に受かり、博士後期課程をスタートさせた。一気に視野が広がったというより、異次元の世界に紛れ込んだような気分だった。毎日のように揺さぶられる中、これまでなんとなく持っていた言語観、学習観、教育観などが目に見えて崩れ落ちていった。

自信作だったはずの修士論文も満身創痍に見えてきた。そもそも学習者にとってメタ言語表現がなぜ必要なのか、単なる定型表現として覚えて使えれば、それでよいのか、メタ言語表現の学習を通して一体何が得られるのか、といった根本的なところについて考えもしなかった。それは、単なる学習者への押し付けではないだろうかとさえ思い始めた。また、メタ言語表現だけに気を取られてしまい、使用される前後の文脈や、その使用にかかわるコミュニケーションの諸要素など、より本質的なところを見失ってしまい、まさに「木を見て森を見ず」の状態に陥ってしまったこともあった。

自分の手で自分の体にメスを入れるような自己批判を経て、やっと研究としての問題意識が明確になり、大きく2点に絞ることができた。一つは、メタ言語表現が使えるようになることよりも、メタ言語表現を取り入れた日本語教育のめざすべき方向性を明確にすべきだということである。もう一つは、メタ言語表現の使用にかかわっている文脈やコミュニケーションの諸要素が、学習者にとってより重要な意味があるということである。

まず、何よりも最初に解決すべき課題は、学習者がメタ言語表現を学習することの意義を追求することであり、日本語教育の現場で計126時間の参与観察、及び学習者17名のインタビュー調査を行った。教室という文脈の中で、教師と学習者の相互作用の中で起こるメタ言語表現の学習が描けるように、メタ言語表現が登場してくる瞬間を瞬時に捉え、忠実に記録していった。学習をサポートするボランティアとしての参与観察だったため、学習者との絆が深まり、ラポールも形成された。その後のインタビュー調査においても学習者から予想を遥かに超えた豊かな語りが得られ、学習者の目を借りてメタ

言語表現とその学習を捉え直すことに成功した。

参与観察とインタビュー調査を通して、メタ言語表現の適切な使用のみならず、適切なコミュニケーション行為を支えている重要なメタ認知能力が確認された。インタビュー調査に協力してくれた学習者のことばを借りると、「コミュニケーションを管理し、マネジメントする力」そのものではないかと思った。これこそ、メタ言語表現を学習することの意義であり、メタ言語表現を取り入れた日本語教育の教育目標の1つになると確信した。メタ言語表現の使用とコミュニケーションのメタ認知<sup>3)</sup>は、車の両輪のように重要な力である。ただし、コミュニケーションのメタ認知の向上につながるメタ言語表現の学習とつながらない学習もある。それをさんざん見てきた私は、車軸のように両者を結びつけることを研究の使命のように感じ、研究の進むべき次のステップもわかってきた。

インタビューで抽出されたメタ言語表現に関する学習者観点<sup>4)</sup>は、メタ言語表現を学習する主体である学習者自ら語ったことをまとめたものである。他の学習者も共感しやすいことから、メタ言語表現の学習とコミュニケーションのメタ認知の向上を結びつけるものとして大きな可能性を持っている。ただし、日本語教育で広く共有するには、まだ多くの不備がある。そこで、学習者観点を理論的に整理することで体系化し、コミュニケーションに関するメタ認知の枠組みを構築することを考えた。そのために豊富な用例が必要となってくることから、メタ言語表現の用例収集とデータベースの構築に研究の重心を移行した。今回は、修士論文の延長線上で収集し続けたテレビドラマ<sup>5)</sup>だけでなく、自然談話データも独自に収集し、さらに、長年かかわっていた研究プロジェクトのデータも許可を得た上で一部使用することができた。

独自に収集した自然談話資料として、地域のラジオ局のトーク番組、民間語学学校の運営委員会会議、ジムのラウンジでの雑談、コンサート前の女子会、商社マンのお疲れ様会、大学院生の勉強会、研究発表の準備、大学院生の雑談を使用した。録音終了後、調査協力者に会話の自然さについて確認し、不自然だと判断され、廃棄した談話資料もあった。留学生として極く限られた社会参加だったが、たくさんの方々に協力をいただき、様々なつながりを持つことがいかに大事なのか身を持って知ることができた。また、実際に使用されたメタ言語表現に関する当事者の使用意識と受け止め方についても、フォローアップインタビュー調査を行い、母語話者ならではの新たな知見も得られた。

最終的に、学習者観点を理論的に整備し、多様な用例によって肉付けすることで、メタ言語表現の学習とコミュニケーションのメタ認知の向上を結びつけるための枠組みを構築し、学習者に還元しうる形で日本語教育へ提言することができた。長い年月がかかり、停滞期も何回かあったが、やっと博士論文を書き上げることができた。

日本語教育学の論文として、一番の意義は何かと聞かれると、私は学習者の存在であると答えるに違いない。そもそもメタ言語表現を学んだ学習者としての問題意識から発

した研究であり、学習者に寄り添う形で調査を行い、研究の成果にも学習者の視点が生かされている。学習者にとってメタ言語表現を学習することの意義について考える際に、研究主体からの押し付けではなく、学習者がメタ言語表現を学習して、使用する様子とその過程を観察し、そこからメタ言語表現の学習の意義を見出そうとした。また、コミュニケーションのメタ認知の向上に結びつくメタ言語表現の学習を実現するために、学習者の観点を活かすべきだと考えたことも、学習者の視点を第一義とする研究姿勢の現れである。分析に使用するメタ言語表現の用例の選定も、分析も学習者にとってのわかりやすさを心がけた。一貫して、学習者の視点が教育現場での調査とメタ言語表現の分析を支えており、日本語教育学における研究の礎をなしているといえよう。

最初はメタ言語表現だけを研究しようと思っていたが、気づけば、いつの間にかメタ言語表現そのものの研究から広がり、むしろメタ言語表現を通して、コミュニケーションやコミュニケーション教育という遥かに広く、遥かに奥深い世界を探求しようとしていたのだ。博士論文の執筆を終えたが、研究はまだ道半ばである。以前行った母語話者のインタビュー調査は博士論文に収められず、その価値がまだ十分に生かされていない。ことばとしてのメタ言語表現はもちろん大切であるが、その使い手であるコミュニケーション主体への注目、今後の研究スタンスになると思う。2020年、博士論文の出版によって、より多くの方々に読まれるようになり、たくさんのフィードバックをいただき、そこから研究をさらに発展させていくためのヒントも得られた。また、日々の教育実践においても新しい課題が次々と出てくる。メタ言語表現を一つの切り口として日本語教育を考えていくのは、おそらく私のライフワークになるだろう。もちろん、これまでの研究を通して、様々な学問に触れてきたため、これからメタ言語表現だけに執着せず、さらに幅を持たせた研究に果敢に挑みたい。

メタ言語表現に出会ってからかれこれ20年もの歳月も経った。この20年間、私は学習者、日本語教師、研究者と姿を変えながらメタ言語表現と共に成長してきた。研究人生の原点となるのは、20年前の授業で配られた4枚のプリントだった。だんだん黄ばんできてはいるが、時々初心に戻らせてくれる宝物として、いまだに研究室で大切に保管している。

## 注

- 1) メタ言語表現は様々に定義されている中、西條 (1999) の定義「談話において、自分あるいは他者の言ったこと、これから言うことに言及する表現」が最も広く認知されている。日常会話における用例として、「話、変わるけど」、「こんなこと、私が言うのもなんですけど」、「余談で、すみません。」、「極端に言えば、」などが挙げられる。
- 2) ディベートの場面で使用されるメタ言語表現、例えば、「先ほどおっしゃったように」、「これから否定側尋問を始めます。」、「～についてですが」、「なんとと言いましょうか。」「反駁いたします。」などを練習していた。

( 14 )

- 3) コミュニケーションのメタ認知とは、三宮 (2017) において「自他のコミュニケーションを客観的に捉えて調整すること」と定義されている。
- 4) 学習者観点というのは、学習者インタビュー調査で抽出されたメタ言語表現を捉える際の観点のことである。具体的には、「人間関係」、「場」、「意識」(特に「表現意図」)、「内容」、「形式」、「文章・談話の展開」、「文章・談話の多重構造」、「文章・談話の理解」に関するメタ認知である。
- 5) 研究を進めるにつれて、テレビドラマのシナリオを資料として使用することに関して、ただ単にフィクションだからとひたすら否定するのではなく、その長所について見直した。例えば、コミュニケーション場面の幅を広げ、用例の多様性をある程度確保できること、不特定多数の視聴者に受け入れられるように、一般性があること、学習者、特に、海外の学習者にとってアクセスしやすく、わかりやすい文脈や豊富な視聴覚情報が提供されていることなどが挙げられる。ただし、バーチャルな世界に終わらないように、現実の世界にある自然談話資料も必要となる。

## 参考文献

西條美紀 (1999) 『談話におけるメタ言語表現の役割』風間書房

三宮真智子 (2017) 『誤解の心理学：コミュニケーションのメタ認知』ナカニシヤ

(り てい、本学助教)